伯母集

森本元子
三村晃功
編

古典文庫

伯母集

森本元子
三村晃功
編

古典文庫

古典文庫第四四七冊

昭和五十八年十二月二十日印刷発行　非売品

編集者　森本元子
　　三村晃功

発行者　吉田幸一

印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1983. Printed in Japan

目次

一　凡例……三
二　伯母集〈山口県立山口図書館本〉……五
三　『伯母集』解説……三〇
四　初句索引……三五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

凡例

一、私撰集『伯母集』の伝本は、『私撰集伝本書目』によれば、三手文庫・山口県立山口図書館・祐徳中川文庫に伝存する三本のみであるが、本書はそのうちの山口県立山口図書館所蔵の写本五冊を底本にして、忠実に翻刻した。

二、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1、漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名等すべて底本のままとした。ただし、漢字の字体は、おおむね通行字体に従った。

2、底本の誤脱、誤字などもそのままとし、明らかに底本の誤りと認められる場合に限り、（ママ）と傍注した。

3、底本のみせけち・補入等、校合の痕跡は大略そのままとしたが、同一文字による修正は、煩を避けて省いた。

4、みせけち・補入など傍書や集付は、大部分が朱書である。まれに墨書のものについては、「（墨）」と注してこれと区別した。

5、便宜上各歌に一連番号を付し、初句索引の検索に便ならしめた。

三、解説は、三村が成立の問題を中心に考察して公表した「県立山口図書館所蔵『伯母集』の成立」（『中世文学研究』第八号、昭和57・8）に、多少の訂正と具体的事実を加えたものである。

四、初句索引は、歴史的仮名遣いによつて配列した。

五、翻刻と初句索引とは、三村が礎稿を作り、森本が大伏春美氏の協力を得て、一々点検した。

六、本書の成るに際し、翻刻をお許し下さつた山口県立山口図書館に、あつくお礼申しあげたい。

昭和五十七年十一月三十日

森本元子

三村晃功

伯母集

〈山口県立山口図書館蔵〉

伯母集巻第一

春

立春の天をよめる

一　いつの間にみとりの空のかすむらん　春立来ぬるそらのかよひち（雲イ）

二　朝かすみしきつのなみにたつ春を　松はきのふのすみよしのしも（マヽこ）

三　かきりなき春のみとりにすみ（本ノマヽ）のかけ　今朝そめいたす天つそらかな

四　春来ぬと人こそいはめいつのまに　今朝うくひすのやとに告らむ

五　天の戸の明行ほとのやすらひに　日影をまちて春や来ぬらん

六　山さとはたなゐの氷とけにけり　春来にけりとくみてしるかな

立春日

七　今朝見れはかすみをわけていつる日の　ひかりや春をさそひ来ぬらん

おなしこゝろを

八　あふ坂の関にしはるをとゝめすは　山のこなたはかすみまさらし

九　冬こもるよし野の山のいはねには　苔のしつくに春をしるらん

一〇　めつらしき春にいつしかうちとけて　まつものいふは雪のしたみつ

立春の霞をよめる

一一　さほ姫の袖はかすみのはつしほに　そめてもうすき春やたつらん

実国の家の哥合に

一二　春のくるところはわかしものゆへに　あしたのはらのまつ霞むらん

一三　春はけさこえぬとおもふにあふ坂の　せきの杉むらなをかすむらむ

一四　いつのまにかすみのころもうちきらし（為家）（続後撰）　雪ふるそらも春はたつらん

一五　いつのまに今朝ひきかへてなには潟　今ははるへとかすみこむらん

子の日の心をなんよめりける

一六　君かためねのひの松を引つれて　千代を手ことにおさめける哉

一七　千年てふ小松ひきつゝ春の野に　とをさもしらす我は来にけり

一八　おふるよりとしさたまれる春なれは　ひさしきものと誰か見さらん

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

一九　幾千代か君によはひを野へに出て　たへぬ子の日の松に契らん

二〇　宮古人子の日するまてしもかれぬ　草葉はしらぬ野辺の春哉

子日の春を

二一　ゆくすゑもねの日の松の根をふかみ　ひくにつきせぬ種はみゆらん

二二　たれとしもわかぬ宿にも姫小松　もとのちきりにひかれてや行

雪中子日

二三　ねのひしてよはひをのへに雪ふれは　二葉の松もはなさきにけり

雪中若菜をよめる

二四　新後撰春上大中臣能宣　かすか野のわかなもいまはおふらめと　人よりさきに雪そふりつむ

多春若なをとるといへるこゝろを

二五　我そのゝわかなをしめてみやこ人　いくらの春をつまむとすらん

二六　行てみぬ人もしのへとはるの野に　かたみにつめるわかな也けり

二七　古今貫之日春。のゝの若なつみにやしろたえの　袖ふりはへて人のゆく覧

二八　川かみにあらふわかなのなかれても　君かあたりの瀬にこそよらめ

二九　若菜つむわれを人見は浅みとり　のへのかすみとたちかくれなん

山霞

三〇　はつせ山かすみの色もふかみとり　春をはしるや峯のときわ木

おなしこゝろを

三一　朝戸あけて遠き山辺のうすかみ（ママ）　見るかうちにも立みちにけり

嶺霞

三二　春はいつこしのしらねのあさくもり　雪気かはらてかすみそむらん

三三　けさみれはあらしも春のかりかね（甲斐）や　ねこし山越かすみきにけり

野霞

三四　杉立る野中のむらの夕かすみ　ふかくなるにも誰うらむらん

三五　今幾か分つゝしてかむさし野の　かすみはてたるかきりをもみん

海路霞

三六　なみこしに見つゝこき行あはち島　小松かくれはかすみへたてつ

遠村霞

三七 きのふ我やとかりくらし過て来し　こやのわたりは霞へたてつ

おなしこゝろを

三八 此さともさこそみゆらめひさかたや　あまのまろ屋もかすみこめつゝ

霞籠島　藏

三九 春くれはまかきの島にかけてほす　かすみのころもぬしや誰なる

夫木二家集哥林俊恵法師

遠村霞

四〇 ほのかにもこすゑはみえしふるさとを　おもひやらするあさかすみかな

霞

四一 ひきわたす大はら山のよこ霞み　すくにのほるやけふり成らん

霞関路を隔つると云心を

四二 春くれはまつそたちきるあふ坂の　関もるものはかすみ也けり

関霞

四三 清見かたなみにかさねてたち籠る　かすみやせきの戸さしなるらん

おなし心を

四四　はる霞都をとをみたちそめて　いまたら(旅)ひなるしら川の関

　　径の霞と云心を

四五　行すゑをたちへたてゝもさはかぬは　かすみの下の野辺のかよひち

四六　梓弓をして春こそ来にけらし　野やまをこめて霞たな引

四七　あつさ弓はるのみそらにいつなれて　やかてかすみのたちかさぬらん

四八　あさみとり春のかすみもしられけり　またいろうすき山のかすみに(本ノマヽ)

　　海上夕霞

四九　ゆふかすみ野しまをかけて立まゝに　あまの友舟かすそきゑゆく

　　公通の家の哥合に人〳〵夕霞をよみ侍る中に

五〇　ゆふなきにうらのとわたるあま小舟　かすみのうちに漕て入ぬる

　　霞の哥とてよめる

五一　宮木をろすそま山人に立そひて　ともにたな引あさかすみ哉

五二　よさのうみはかすみへたてゝいつ方に　千舟とるてふおほかたのそら

五三　いまもなをゆきはふりつゝ朝かすみ　たてるやいつこ春は来にけり

五四　あまの戸の明ゆく空はかすみつゝ　又またあら玉の春は来にけり

橋霞

五五　かせをたに後。しもはてすたちこめて　霞みにしつむくめの岩はし

五六　はる来てはかすみの淵にわたしけり　きゝしやいつくあさ水のはし　催馬楽

江霞

五七　伊せのうみやかすみもとをくなかれ江の　荻のふる枝にはる風そふく

五八　みしま江や芦のしのひにうつりきて　かすみもそよく春の夕かせ

滝霞

五九　うす氷とくるをとはのはるかせに　かすみをむすふたきのしらいと

おなしこゝろを

六〇　たきのをとくるれはいとゝたちまかふ　霞を雨のふるのかみやま

雪気のかすみと云心を

六一　このほとはあらしも雪もなをさえて　かすみにうすきよもの山の端

空のかすめるといふ事を

六三 春はいまと渡りくらしあまのはら　雲井はるかに今朝は霞める

六四 さほ姫のかすみのころも袖さへて　たつとは見れと春はすくなき

海辺霞

六五 はるかすみへたつるころはしらなみの　こすとも見えぬすゑのまつ山

おなしこゝろを

六六 あきさゐるうなかみかたをみわたせは　かすみにまかふしたのうき橋

晩霞

六七 かり行はかた野のみのにたつ鳥の　はきはも見えぬ夕かすみかな

山田の霞といふ事を

六八 しめはへて賤のあらまく小山田の　春のかよひはかすみなりけり

海辺のかすみといへる事を人〳〵よみ侍りしに

六九 なに波かたゆふあさりする芦鶴の　こゑはかすみの水（名）にそ有ける

おなし心をよめる

七〇 いはみかたふかくかすみのなり行に　こきはなれぬるほとをしるかな

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com